

 <p>Zambia</p>	学校名：埼玉県立本庄特別支援学校	● 実践教科等：生活単元学習、職業・家庭、美術
	氏名：佐藤 大樹	● 時間数：7時間 ● 対象生徒：中学部2年生 ● 対象人数：13人
[担当教科：全教科]		

- 1 単元名：{①廃品を活用してオリジナルチテンゲを作ろう
②ゴミを分別して捨てて、市町村ごとのゴミの出し方を知ろう}

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

○日本の文化とは異なるザンビアの文化を知り、他国の暮らしや文化を知り、認め合いながら尊重する態度を養う。

(①批判的に考える力、⑥つながりを尊重する態度)

○世界の諸課題を自分の身の回りの生活に関連付けながら主体的に解決しようとする態度を養う。

(⑦進んで参加しようとする態度)

○ゴミ問題をきっかけとして、自分自身の生活の中で世界とつながっている点を発見して、自分ができることは何なのかを考えて行動する態度を養う。

(③多角的、総合的に考える力)

○分別したゴミを集積場に出す曜日や時間帯等、自治体によってゴミの出し方が異なることを知る。地球環境を保護する為にも消費者として責任をもってゴミ出しのルールを守って、捨てるのが大切だということを理解する。

(②未来像を予測して計画を立てる力)

3 単元の指導について

(1)教材観

本校中学部の設定する、「職業・家庭」における各学年においてつけたい力の中の、『消費生活、「自治体ごとのゴミの出し方を知る」(中学部2年生)』を基に、本授業を構成した。

「職業・家庭」の時間において重要な要素となる、「生活や職業に関する実践的・体験的な学習活動を通して、よりよい生活の実現に向けて工夫する資質・能力」の育成を重視し、授業を展開していくことを意識した。国際理解教育を実践する為には、日常生活の中の課題を取り上げることが実感を伴う学習になると考え、ゴミ問題に取り組む。実際にゴミの分別を生徒が行うことや、近くの友達と話し合いながら自治体ごとのゴミの出し方の違いを発見する実践的・体験的な学習活動を設定した。また、他教科との関連を図り、国際理解教育に取り組もうと考え、職業・家庭のみの授業実践に留まらず、美術では廃品を利用してオリジナルチテンゲの制作活動に取り組んでいる。本時においては生徒の生活の中にある「ゴミの分別」を取り上げることで、自分の生活と世界がつながっていることを意識するきっかけになることを期待している。

(2)生徒観

本学年は男子7名、女子6名で構成されている。障がい面では自閉症、インフルエンザ脳症による精神遅滞等、様々な知的な障がいのある生徒がいる。コミュニケーションの面では、主体的に会話ができる生徒も数名いるが、発語のない生徒もおり、自発的なコミュニケーションが困難な生徒もいる。しかしそれぞれの生徒が実態に応じたコミュニケーション手段を獲得しており、教員や友達とそれぞれの形でコミュニケーションを取ることができる。日常生活技能の面では、排泄等自立している生徒が多いが、数名支援を必要とする生徒がいる。日常生活の中で、ゴミ捨て担当などの係りになっている生徒も多いが、学校生活において、ゴミを分別して捨てるということを意識して生活している生徒は少ない。認知、コミュニケーション、日常生活技能面等において実態差が大きいが、本学年の生徒は、学校生活だけでなく、校外行事等でも、互いに教えあい、学びあい、支えあう姿がこの学年の強みである。

(3)指導観

昨年度に引き続き、年度当初より、木曜日と金曜日の6時間目に職業・家庭の授業に、進路学習、家庭での役割、消費生活の3本を柱として、継続して取り組んできている。木曜日には、「机ふき」や「整髪」、「ワイシャツの着方」等、職業分野、家庭分野を学習している。金曜日の職業・家庭では、「清掃」に焦点を当て、ほうきの使い方、掃き方等を実際の清掃活動を通してほぼ毎週学習している。継続的に繰り返し学習することで、職業・家庭の授業で取り組んだことを、家庭生活でも活用することができる。「ゴミの分別」では、昨年度、燃えるゴミ、ペットボトル、空き缶などを分別して捨てるという内容で学習を行った。校外宿泊学習のときなどにも、飲んだ缶やペットボトルを捨てるときに、生徒自身で判断して、ゴミを捨てることができていた。今年度は、「自治体ごとのゴミの出し方を知る」という内容で授業を行う。昨年度の学習を土台として、以下の2点から、題材を選定した。

- ①生徒が、分別して捨てた家庭ゴミは、近所の集積場に出されるということを知る。
- ②生徒が、自治体によって、ゴミの出す曜日等が異なることを知る。

以上2点を生徒たちに知ってもらうことで、「分別してゴミ箱に捨てる」というところでとどまっている知識を、「捨てたゴミを近所のゴミ集積場に持って行き、処理される」というところに知識の幅を広げたい。

本題材を国際理解教育として展開するために、ゴミを分別し、自治体ごとのゴミ回収のルールにのっとりゴミを捨てることで、きれいな生活環境が守られるということ、ザンビアと日本のゴミ問題について触れながら、指導したい。

4 本時の学習

(1)共通目標

- ・ゴミを分別して捨てることができる。
- ・市町村ごとに、ゴミの出し方に違いがあることを知る。

(2)本題材における実態と個別目標

	本題材における実態	個別目標
A	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。家庭生活と学校生活両面でゴミを分別して捨てることができる。ゴミを分別して捨てることは理解できている。自治体ごとのゴミの出し方の違いがあることは理解していない。	・自分の地域の可燃ゴミを出せる曜日を答えられる。
B	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。家庭生活と学校生活の両面で、ゴミを分別して捨てることことができる。家庭生活においてはゴミ出しを手伝いの一環として取り組んでいる。	・自分の地域の可燃ゴミを出せる曜日を答えることができる。
C	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。ペットボトルや缶など、捨てる場所にイラストがあれば、その場所に捨てることことができるが、分別の種類が複数あると、抵抗感を示す。	・イラストを見て、ペットボトル、缶を分別して捨てることことができる。
D	今年度より本校に転学した為、昨年度、本校ではゴミの分別に関する学習をしていない。家庭生活においてはゴミを集積所に出すことを手伝いの一環として取り組んでいる。	・自分の地域の可燃ゴミを出せる曜日を答えることことができる。
E	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。もえるゴミ、もえないゴミを分別することが難しい。教員が捨てる場所まで一緒に行き、袋に入れるという活動を行ってきた。	・教員と一緒に空き缶、ペットボトルをゴミ箱に捨てることことができる。
F	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。分別して捨てることは可能であるが、ゴミを集積所に運ぶ経験は乏しい。自分の住んでいるところのゴミの出し方のルールを学習すれば、家庭生活でも実践できる生徒である。	・自分の地域のゴミを出せる時間を答えられる。
G	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。ゴミを分別して捨てること難しい。イラスト掲示があればゴミ捨てができるときもあるが、ゴミ箱の中にゴミを入れることなら確実にできる。	・イラストを見て、ペットボトルのゴミを適切な場所に捨てることことができる。
H	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。ゴミを捨てる場所を指差しすれば捨てることできた。絵カードのマッチング等はできるため、イラストを見て捨てる学習に取り組めるようにする。	・イラストを見て、缶とペットボトルのゴミを適切な場所に捨てることことができる。
I	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。ペットボトルや缶などのゴミを一つ持ち、イラスト付きのゴミ箱に捨てることことができる。可燃ごみや不可燃ゴミの混ざっているゴミを分別して捨てられるようにする。	・イラストを見て、缶とペットボトルのゴミを適切な場所に捨てることことができる。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

J	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。ペットボトルや空き缶を一つ手渡すことで、決められた場所にゴミを捨てることができる。複雑な指示には抵抗を示し、自傷する為、活動内容をスケジュール化し見通しを持たせ学習活動に参加できるようにする。	・イラストを見て、缶とペットボトルのゴミを適切な場所に捨てることができる。
K	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。イラストを見て、ペットボトル、缶、燃えるゴミを捨てることはできる。自分の住んでいる地域のゴミの出し方のルールを知ること、ゴミの出し方を手伝えるようになり、家庭での役割も増やせる可能性がある。	・可燃ごみとペットボトルと缶を、自分で分別して、適切な場所に捨てることができる。
L	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。家庭生活と学校生活の両面で、ゴミを分別して捨てるとすることができる。家庭生活においてゴミ出しを手伝いの一環として取り組んでいる。	・自分の地域の可燃ゴミを出せる曜日を答えることができる。
M	「ゴミの分別」は1年生のときに学習した。家庭生活と学校生活の両面で、ゴミを分別して捨てるとすることができる。家庭生活においてはゴミ出しを手伝いの一環として取り組んでいる。	・自分の地域の可燃ゴミを出せる曜日を答えることができる。

5 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	ザンビアの場所、文化を知ろう。(生活単元学習)	・日本とザンビアの位置関係、文化などを体験的に学び、ザンビアについての理解を深める。	・google earth を使用して、日本とザンビアの位置関係を示す。 ・「アフリカ」という言葉から生徒がイメージしたことを発表する。 ・ザンビアの学校の様子を写真で紹介して、ザンビアの学校の様子を知る。 ・写真をモニターで見ながら、ザンビアで出会った人や動物、文化などを紹介する。 ・ザンビアで買ってきたクッキーをみんなで味わう。
2	ザンビアのチテングを体験しよう。(生活単元学習)	・ザンビアで購入したチテングに触れる。 ・チテングを自分で巻いてみる。	・ザンビアで購入したチテングを巻いたり身につけたりして、実物に触れる。 ・ザンビアで撮影したチテングを活用している写真を見て、使い方を知る。
3	廃品を活用したオリジナルチテングをデザインするために計画を立てよう。(美術)	・どのような廃品を活用するか選び、今後のチテング制作活動の見通しをもつ。	【クラス別】 ・チテングを作るうえで、必要となるものを、「布の色、使う絵の具の色、使う形」の3点を選択する。 ・使う廃品を選び、自分の使いたい形を作る。 ・実態に応じてデザインを紙に書き、イメージを膨らませる。
4	廃品を活用したオリジナルチテングを作ろう(美術)	・各クラスで制作活動をする。 ・個別の目標に応じて、布に色を塗ることができる。	【クラス別】 ・クラスごとに制作活動を進める。
5 本 時	自治体ごとのゴミの出し方を知ろう。～ザンビアのゴミ問題を解決するためには～(職業・家庭)	・市町村によって、ごみの出し方や、回収日が異なることを知る。 ・捨てられたごみは、どのようなようになるのか知る。 ・ごみを分別して捨てることの重要性を再確認する。	・SGDsの11、12、14、15のイラストを見て、何が書かれているか考える。 ・日本とザンビアで撮影したゴミの散らかっている写真を提示し、なぜこうなるかを考える。 ・身の回りの生活が世界の課題とつながっているということを知る。
6 7	オリジナルチテングを紹介しよう。	・友達にチテングを紹介する。	・自分で作ったチテングを身に付け、友達の前で紹介する。 ・工夫した点を説明する。

6 授業事例の紹介

小単元名【自治体ごとのゴミの出し方を知ろう。～ザンビアのゴミ問題を解決するためには～】

(1) 指導案

(ア)実施日時 9月27日(木)第6限(30分)

(イ)実施会場 中学部2年1組教室

(ウ)本時の目標

- ・ゴミを分別し、適切な場所に捨てることができる。
- ・自治体によって、ゴミの出し方に関するルールの違いを知ることができる。

(エ)指導のポイント

- ・昨年度学習した、「ゴミの分別」を復習するところを授業の出発点として、体験的な活動を設定することで、実際に身体を動かしながら学習できるようにする。
- ・STと事前に打合せをして生徒の実態に応じた支援を考え、個別目標を達成できるようにする。

(オ)本時の展開

過程・時間	学習内容	○学習活動	指導形態	指導上の留意点 教員の指導支援 (●MT、○ST)	評価
	① SDGs を提示し、何が描かれているかイメージする。	○提示されたSDGsのイラスト(11、12、14、15)を見る。 ○イラストに何が描かれているか気付いたものを発言する。 ・魚、森、ビルなど・・・	一斉	●意見が出なければ、魚や森を指差しし、「これは何？」と質問する。 ○意見が出なければ、近くでヒントを与える。	
	② ゴミが道に散らかってしまう理由を考える。	○ザンビアと日本で撮影した道端にゴミの散らかる写真を見る。 ○なぜ散らかってしまうのかを考える。 ○考えたことを友達の前で発表する。	グループ 個別	●「ポイ捨て」というキーワードが引き出せるようにする。 ○生徒たちの会話に入り、適宜支援する。	
	③ ゴミの分別	○昨年度、ゴミの分別の学習をしたことを思い出す。 ○可燃ごみ、ペットボトル、缶を用意し、一つずつ渡し、それぞれを適切なゴミ袋に捨てる。	一斉 個別	●昨年度の学習している様子を提示して、昨年度の学習を思い出せるようにする。 ●生徒の実態に応じて、ゴミを選び、渡す。	個別目標を達成できているか。 C,E,G,H,I,J,K
	④ 自治体ごとのゴミ出しのルールの違い	○捨てたゴミを、集積所に出すことを知る。 ○パワーポイントを見ながら自治体ごとにゴミ出しに関するルールの違いがあることを知る。	一斉	●④と⑤の学習が関連性を示す為、④の学習の振り返りをして、⑤の学習に入る。 ●一方的な情報量が多くならないように、要点を絞る。 ○理解に困ったり、集中力が切れている様子の生徒がいた場合、近くで声かけ支援をする。	個別目標を達成できているか。 A,B,D,F,L,M
	⑤ 環境を守る為には	○ザンビアと日本で撮影した道端に散らかるゴミの写真を振り返る。 ○教員の話聞いてルールを守ってゴミを捨てれば、このようなことにならないことを理解する。	一斉	●③で提示した写真のような状態にならないようにするために、ルールを守り、ゴミを出すことが大切だということに気付けるようにする。	

(2) 授業の振り返り

本時では、「自分の身の回りのことが、世界の問題点とつながっている」というテーマで貫く授業ができたと感じている。生徒の反応も良く、生徒たちの意見交換や発言の場面で盛り上がる様子が見られた。導入部分での学習内容①では、生徒たちからの意見があまり出なかった。しかし、その後の学習内容②では、意見を求めると、「ポイ捨てが原因だ」「ルールを守っていない」「責任が無い」という意見が出たので驚いた。「責任が無い」と言った生徒は、SDGs12の「つくる責任、つかう責任」のイラストをきっかけとして、そのような意見を出したのではないかと思う。その後、学習活動④では、家庭生活で手伝いとして、ゴミ出しに取り組んでいる生徒が数名いて、その生徒は可燃ごみを何曜日に出すか理解している生徒がいた。その生徒は、住んでいる地域が異なっていた為、自分と友達とではゴミを出す曜日が異なっているということに気づき、大いに驚いている様子が見られた。

(3) 使用教材



(4) 参考資料等

- HP ・深谷市 ごみのだし方
 ・ごみ 埼玉県神川町ホームページ
 ・家庭ごみの分け方・出し方 本庄市ホームページ

7 単元をとおした生徒の反応/変容

生徒たちは単元を通して、「文化体験」を多く経験できたと感じている。特別支援学校における国際理解教育と言うことで考えたときに、食事や衣服などの文化を経験することが重要だと考え、本単元を構成した。生徒たちは、チテンゲ制作やゴミの分別に積極的に取り組んでいた。特にザンビアで撮影してきた写真を提示すると、動物の写真などに関心を示す生徒が多かった。集団での学習に参加することが困難な生徒も、動物の写真を見せ、「これは何？」などと聞くと、「キリン」などと答えたり、友達の前に出てこられたりして、集団活動に参加することができる生徒もいた。食事の写真では、日本で普段食べているものと異なる為、「食べてみたい」と反応する生徒もいた。単元を通して、どのように生徒が変容したかということを見ることは難しかった。しかし、単元が終わった後、制作した作品を文化祭で展示させていただいた。その展示の準備をしているときに、授業のことを思い出し楽しそうに生徒同士で話している姿も見られた。生徒たちも私が授業中に伝えた、「ザンビア」や「チテンゲ」という言葉をいくつか覚えられたようだった。それ以上に、ゴミに関する学習では、「ポイ捨てはいけない。」「分別して捨てる」「ルールを守ってゴミを出す」ということが生徒の発言から出てきたことが何よりも良かったと感じる。

8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

私が特別支援学校での授業実践を考えた時、最も苦労したところは、何を題材に授業を行えば、生徒が世界の課題を考えられるかということだった。本校に通う多くの生徒は世界の多様性に触れる機会があまり多くはない。そのため、何をきっかけとして、授業実践をすべきなのかということはとても悩んだ。私は最初に、調理実習ということでシマ作りを行なおうと考えていたが、現地に入り考え方が変わった。私がまず衝撃を受けたことは、道端に散らかるゴミである。道端には多くのゴミが捨てられていて、なぜこのような状況になるのか分からなかった。現地研修を通して、ゴミが道端に散らかってしまう理由を知った。本校中学部では「ゴミの分別」というテーマで昨年度学習をしている生徒が多く、ゴミは分別して捨てなければならないという意識は生徒の中にあり、本校中学部2年生では、「職業・家庭」の授業の中で、「自治体ごとのゴミの出し方を知る」が学習テーマとして設定されている為、その部分と関連させ授業実践をすることになった。現地研修で、授業実践の題材を考えていると、ゴミ問題や水の課題を含めて「日常生活の中には、国際理解教育の要素を含んでいる題材がたくさん存在している」ということに気がついた。最終的に、本校の生徒に対して、国際理解教育の視点から「自治体ごとのゴミの出し方を知る」というテーマで授業実践をすることにした。派遣前研修等の教師海外研修のプログラムを通しての授業実践について成果と課題を以下に記す。

【成果】

- ・昨年度の学習を生徒が覚えていて、ゴミの分別から、自治体ごとのゴミの出し方の違いへと知識を深めることができた。
- ・家庭でのお手伝いとしてゴミ出しに取り組んでいる生徒が数名いた。その為、可燃ごみを出す曜日を知っている生徒が数名おり、友達とはゴミを出す曜日が異なっている為、生徒から意見が出たときには盛り上がった。
- ・ゴミが散らかっている写真を提示すると、「使う人の責任感が無い」という意見が出た。SDGsの12から、そのような意見が出たということは成果として挙げられる。

【課題及びその改善策】

- ①導入部分で SDGsを活用したが、生徒にとっては抽象的で難しかった様子だった。改善策としては、もっと具体的な事例を挙げてから、SDGsを提示した方が、イラストと事例がつながり、生徒の理解も深まり、より多くの意見が出たのではないかと。
- ②授業実践では、生徒の実態を考慮し、個別目標を設定している。1ゴミの分別、2自治体ごとのゴミの出し方を知るというように大きく分けるとこの2点になる。個別目標が1で設定されている生徒(C,E,G,H,I,J,K)が、どのようにして自治体ごとのゴミの出し方の違いを学べるかが課題として挙げられる。改善策としては、伝えたいことを最小限に絞り、伝えたほうが生徒も理解できると考えられる。
- ③「自治体ごとのゴミの出し方の違い」というテーマだったが、今回は(1)可燃ごみ、資源ごみの出せる曜日、(2)ゴミ袋が指定されているのか、(3)ゴミを出せる時間帯の3点に絞り授業を行った。しかし自治体によって、細かく複雑にルールが異なっている為、ポイントの絞り方が難しかった。この3点でも説明は複雑だったので、ポイントの絞り方が課題として挙げられる。改善策としては、②に同じ。

9 教師海外研修に参加して

本研修は、8日程度の活動日程の中で、内容が凝縮されていた。ザンビアの自然、文化をはじめ、ザンビアの教育事情や教員との意見交換、学校視察、青年海外協力隊員との意見交換や交流もすることができた。すべてのプログラムにおいて、ザンビアを理解することができた。その中で私は、参加者が「人は幸せになるために生まれてきた」と言った言葉が印象に残っている。私も人は幸せになる為に生まれてきたという言葉に同感しているからである。それでは、人が幸せに生きるには、どのような条件が必要なのだろうか。今回の研修を通して私は幸せになる条件として、「一方的な文化を比較されないこと」が必要ではないだろうかと思った。コンパウンドで見た居住環境は、日本人から見たら物質的には足りていない「貧困地域」であったと思う。しかし、そこで生活している人たちは幸せではないのだろうか。そこで暮らしをしている人たちにとってはその環境が当たり前で、当たり前のように生活をしている。そのような人たちを目の前にしたときに、ザンビア人の生活環境を、日本人の尺度で比較することはできないだろう。その人たちが生活している環境を日本人として尊重しながら国際協力をすることの重要性を感じ取った。

私はこの研修に参加し、「ボランティア」という言葉のイメージが大きく変わった。特に、JICA ザンビア事務所の次長の言葉にあった「オーナーシップとサステナブル」に象徴されている。協力とは、あるものがないものに与えるのではなく、ザンビアではどのようなことが必要とされているのかというザンビア人の視点に立つことが大切であるということである。また、それが状況や活動が変化しても持続可能であるということが、「協力」するという事で、大切な考え方であるということが分かった。